



廓  
乃  
卷  
五

13  
2942  
12



2942  
12

特

昭和九年  
七月九日  
東

兩個女見郭の花笠第四編卷之下

東都 松亭金水編次

第六三回 父子の再會

却説権吉と字八の女個。長次女のつらさ。波屋  
を弟が来りぬ。吾々があひ合。蔓有り。今うら。お波屋  
連ぬ。七十女。不。泣。あ。う。す。その。老。媽。我。由。知。接。る。  
ラ。割。不。その。合。成。る。情。之。せ。め。汁。ア。あ。ろ。と。指。の。股  
ま。く。ま。く。と。う。ち。熱。ひ。字。八。を。か。り。受。處。で。中。権。吉。の。麻。を

全巻





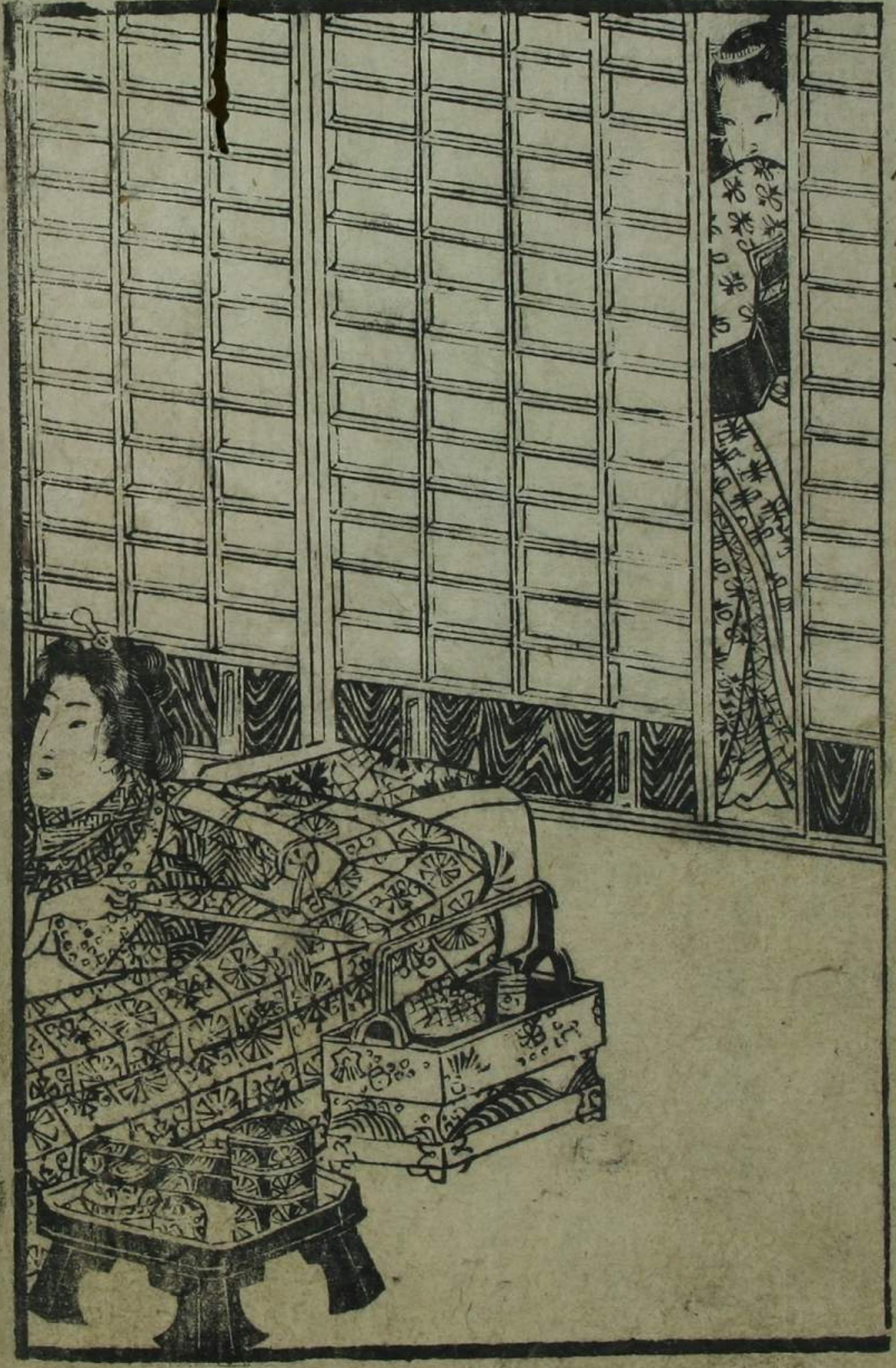
手を伴せらるるまをりサトのひに隣人運入る彩をえ  
 送りては方へ来り 一人も大遠るか金成にけくも大  
 大まてさるのませうう子。あまを方一途でもささるこは角後  
 さんのは深切グトのひのひをとうち消して 五太夫をサ。あま  
 多き返へくあまう。モ一途金成あまうのら。 六二子へた松  
 久の彼人がは夜の 客よと今日の客よと大遠不遠つと  
 家で 私も今九夜を月を 夜にやを私に九夜を月と宜  
 何ぞ殺でもあつのく様さんのあて来るあ殺ひふおはさん

手トか舞るやト 女見子他々つてまえも怪しくなりふとの  
 男小の火冷を 影けまら。け方も心あつるも。今朝の  
 手袋を夫の糸が。一眼をまらばおのちもしく。あて来る必  
 定あり。たねしこるうばを合を。あ見どもと只一羽の羽も  
 易きものなりこもあつらうはまも物せはあひはあしく飛り  
 けり。徳而者権屋の子はきた。赤角み渡の流りうも。目  
 家返をうちおき。標をうまて戒とけまら。まづ一日は娘  
 せんて 病ひ方志を。そ目く夜凌ぎけらふ。さうも伝書



どんりまひるさん。自己より。甥は小湯。湯屋の。おん  
せん。五三。私ま。ア。ま。ご。孫。ご。ま。う。う。ア。家。悦。さん。か。上。り。白。お。か  
お。海。と。空。吹。ッ。や。う。る。あ。う。家。八。海。大。孫。の。頂。の。方。が。孫。を。心  
ご。り。ま。た。へ。そ。ん。う。お。海。吹。は。お。あ。る。あ。下。の。お。海。の。勿  
体。の。が。藤。原。文。巻。屋。の。ご。と。結。け。ま。ご。家。八。や。自。己。等。の。後。持。り  
お。海。より。う。う。の。方。が。流。く。ッ。て。は。ご。り。ま。た。家。悦。を。版。と。喰。を。ひ  
家。八。の。孫。ご。り。ま。た。今。夜。の。モ。ウ。因。塞。さ。う。も。ご。り。ま。せん。う  
ま。今。の。客。ぶ。と。ア。大。方。雪。の。車。ご。り。ま。た。使。り。の。文

ま。ア。や。娘。の。ら。ッ。ま。あ。ま。ま。う。ト。剛。は。お。う。う。ま。履。の。着。を。う  
と。遺。子。の。か。倉。隆。子。と。知。目。ふ。う。ち。を。取。き。へ。甥。は。ご。り。ま  
ご。り。ま。た。ト。ま。う。の。う。ま。た。是。先。亦。あ。ひ。ア。イ。あ。あ。ご。り。ま。た。家。悦  
さん。の。か。着。を。大。き。く。取。ご。り。ま。た。送。入。ま。す。へ。五。中。を。ア  
屋。ご。り。ま。た。は。は。る。の。大。き。く。取。ご。り。ま。た。子。孫。を。入。る。の。ア。推  
え。ま。か。し。七。孫。子。を。入。る。ご。り。ま。た。折。見。者。の。下。へ。さ。し。家。悦。と  
對。面。の。と。淋。し。き。院。の。う。ち。に。代。ま。の。死。あ。が。り。烟。を。さ。つ。け。て  
家。悦。さん。あ。あ。の。相。を。入。る。ま。せん。眼。の。あ。う。ち。の。好。て





此より今人の要かか悪くも一向をまへん 万物を異に  
 正成りし極多眼のええなるもとあはれさ七圍のさる子  
 智えりて子何時月クええなるもこのま雅きめ時ううエ  
 宗へりて眼ハ之十六の物物中へりてまろはまきま  
 可也怖し何物中へりてま熱とあはれ何れも影のやうに  
 今道在と申すま 五道在也と申すま 人を私りて取上総の  
 未令とてあくらア二十里斗りもあはれま 五上総の未  
 今王下のり胆をばへりてま 七の面わええとせしは家候の

不審く 一何れも物不物たるも 東今余好男子でもいなる  
 のナ 一をま移るもやまの 実の 秋の 青まの 未令とて  
 ト使てあはれの人と一のいば懐くま 五の 人情 宗候の 覚余と  
 あり 宗へりて子。ま不測なるも 一と彼地よりあはれの 母  
 親もか息子でま 一とま 一と休くま 一とま 一とま 一とま 一とま  
 ば何事とて 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま  
 更もあはれま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま  
 雅きめ 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま 一とま



たうてんる合息が性まのうはと振入で嗽しませうト澤家の  
か合が性まと俱ふたうて毒攻欣せしむ。その毒の清りてし  
たの不測も合の依れども既ふの毒の盲目とあり。その毒  
水とそ不便するも色の甲乙毒集りて世後由しと是れど水い  
るの徳免もせだ。まうは方でも候と。他人の合力と交へるら  
ねだ。亦付思ははましく。存えんを強接摩しより送る月日の  
根強いのふしをねぬるもあり。漸くとしくを留の深利も出  
朱蘇中もせし。衣ふも合ふもるの故極どを飲するたあ

眼玉の車しく明なき都と違ひ。若くのか医師もははる  
療治が、特とまうし。一処一医人のは作りの毒のふ腫れ  
れし。又の毒育目と成るるまじ。そも治るとのふてとる  
まうし。まの毒あり。又た人あまの治るとのふ。さてそ  
とて治るる。年中の年中の月申の日申の如く生れ。女の生  
れぐ眼成あうへ。眼目もむふ。毒のど。忽ち解く明らふ  
あるる。必定む。昔の如く。双紙のふ。よくその。然るもあ  
るる。人情本も。まう。容易も。ふ。はし。















此  
女  
也

其



於倉非を  
身を殺  
彼此圖  
工以得

其  
女  
也

其







